

創めの地ここに

1

生れて間もない乳呑児ちのみこを乗せた乳母車を押して、二軒の家をかわるがわる訪れていた。

—もう、何度行き来したことか…。

押す乳母車も心なしか重みが増してきたように感じた。それ以上に心にかかる重みが大きかった。二軒の間を往来して訪ねる先の応答はいずれも決まっていた。

「あちらさんがよろしいと言われるのなら、私も承知するが…」

両方の家では異口同音に、共に決定権を相手に委ねて優柔不断な態度を見せるのだった。何度訪ねてもその言葉は変わらない。

人の常のことながら、日頃親交のない人たちの信頼を得ることの難しさ、カネにまつわることの厳しさが、あらためて思い知らされた。

だが、寺部だいは、なんとしても用件を達成しなければならなかった。願うのは、頼母子講たのもしこうで落札した二百円の受け取りの保証を得ること。それは、だいが最近創った裁縫女学校の運営のために欠かせない資金なのだ。開校まもなく校舎の増築が必要になり、三百円の資金の調達にかかった。



昭和2年ごろの寺部だい

桜井村（愛知県碧海郡、現安城市）川島のある寺で開かれた頼母子講に加入して、幸い第一回で落札できた。その金額は二百円だったが、これを受け取るためには連借印が必要だった。

その保証人に二名が指名された。村で一、二に屈指される大地主だった。だが、だいはその人たちとはこれまで深く交際はしていない。

―連借印を押してもらえだろうか。

承諾が得られるか案じたが、果たしてその不安は的中した。

お願いに上がったものの、案の定、要領を得ない。結局、確答を得られないままに両家を行ったり来たりすることになった。

両家の間は一キロ程、車を押しての女の足では二十分はかかろう。

交渉は夕方からかかって、次第に夜が更けてもなお続いた。

2

「長丁場」は日付が変わる頃まで続いた。だが、零時を過ぎるあたりでやっと事が開けた。

玄関先で何度目か話し合っているとき、床に就いていたその娘が起き出してきて父親を口説い



東京裁縫女学校（現東京家政大学）教員認可証（明治39年）

中にともし火がともっていた。

—これで、早く校舎を建て、少なくとも五十名以上を受け入れられるように…。

学校のこれからの運営を夢見る希望が湧き上がっていた。と同時に、自分が安城に学びの場を設けるようになったこれまでの由縁（ゆえん）にも何か不思議さを感じていた…。

*

だいは、明治三十五（一九〇二）年、東京裁縫女学校（現渡辺学園・東京家政大学）へ入学・履修して、同校の教員辞令を受けて正式の教員になるとともに文部大臣から教員認可を取得。母校の教生になったが、明治三十九（一九〇六）年に、滋賀県の石部実業補習女学校に、裁縫科教員として赴任した。二十四歳での自立であった。

この履歴を見ると、人生の表通りを足どりも順調に歩いたようにも推量される。しかし、そうした自立までの道のりの曲折は並みではなかった。

了承させてくれた。その娘は、たまたまだいの学校に在学しており、聞きかねて首尾を図ってくれたのだった。

これで、もう一方も折れて納得。無事請印を願うことを得た。我が家のある安城へは四キロ以上もある。その夜道をたどって帰宅したのはまさに丑三（うし）つ時、午前三時を過ぎていた。

深々（しんしん）と更け切った夜の冷気は寒々と身に迫った。しかし、胸



寺部だいが裁縫を習った桜井の円光寺

だいは、幼い頃から家庭的な境遇には恵まれていなかった。家業が没落し、父なし子、母一人子一人の家庭環境のもとで、生活の苦しさに耐えた。そんな中、だいは学びに励んだ。

3

明治十五（一八八二）年十月二十日生まれのだいは、学齢に達するのは二十二（一八八九）年四月だった。だが、その半年前の二十一（一八八八）年九月に桜井尋常小学校へ入学した。

その動機には訳があった。

その年の四月、母子は善光寺参りをした。鉄道も通じていない当時のこと、道中は徒歩だった。だが、その帰途、山道で迷いそうになった。二筋の分かれ道に古びた道しるべがあった。夕闇迫る中、石に刻まれた文字を指先でこすって読んだ。そのおかげで、夜の山道を行き迷うことなく、伝え聞く山犬（狼）に襲われこともなく済んだ。母は無学だったが、古着売買の商いの必要上ひらがなの読み書きは身につけていた。そのため、「右 かきのみち」と刻まれた文字を

読んで、正しく柿野の宿へ向かうことができた。さもなくば、行き暮れた夜の山道で生死にかかわることになったかも知れない。

この体験が、母にいたく感じさせることになったらしい。

「だいを小学校に入れるのだ」

家に帰ると、母はすぐ小学校に出かけた。道しるべの文字を読むことで救われた。この体験から、識字の大切さを感じた母は、いかにしてもわが子に学を身につけさせようと決意したのだった。

だが、特別入学してまでの小学校も三年の学習で終わった。

かなの読み書きには事欠かなくなったからという母の意向だった。当時は「女兒を入学させる家庭はお寺様か学校の先生かお医者様ぐらい」と言いはやされる時代であった。そんな中に母子家庭の子女が通学するのは奇異ですらあった。母にはそうした風潮に周囲への遠慮があったのかも知れない。代わって夜学塾へ通うように勧め、だいは塾の勉強と並行して暮らしを助けるためのお針仕事を習い始めた。

4

お針仕事で家計を助けるうち、夜学塾では、修身、国語、算術、地理、歴史と、高等科程度の学力を学ぶことになり、だいの勉学熱も高まっていた。だが、それもおよそ七年、家計を助けるた



寺部だいが 15 歳までの 7 年間学んだ塾、長谷部新蔵氏の寿碑（桜井町印内）

め明治二十九（一八九六）年に塾を辞めて針仕事に専念することになった。

そうした中、十六歳になっただいは、確実な生計として小学校の教師を志望した。

しかし、小学校は三年足らず、夜学塾には七年通ったが正規の学校のように組織的な教育を受けていない。そのため、師範学校に入りたくても受験資格がない。やむなく裁縫を教える教員を志望して、裁縫専科教員の試験を受けた。だが、失敗した。三年続けて挑戦したが不合格だった。小学校中退、夜学塾通いの学業レベルで、基礎学力も乏しく教育課程にも通じていない身には適わない難関だった。

この現実には、だいは一心発起した。この道で本格的に技術・知識を習得するため、明治三十五（一九〇二）年四月、東京裁縫女学校（現学校法人渡辺学園・東京家政大学の前身）に入学した。学力、資力に不十分な地方の子女が単身上京して学ぼうというのは冒険でもあった。だいはひたすら母に懇願して許しを受け、母が懇意にしている二人から月々の学資を融通してもらうことにし、学びに就いた。

基礎学力を補うため、昼は裁縫女学校、夜は教員養成所で学び、これまでのハンディキャップの克服に努めた。だが、やがて郷里からは送金不能の知らせが届く。小さい時から母とともに苦難に

耐え抜くことには慣れていたいはいは、この状況にも耐えた。生活は自活のため極度の儉約を図り、電灯もないカンテラ生活、食事は国元の母から送られてくる米と味噌と梅干だけ。朝晩は味噌を溶かして飲み、昼は梅干を唯一の副食にして済ませた。学資を生み出すためあらん限りのアルバイトもした。朝早くは新聞配達、新聞の立ち売り、牛乳配達、納豆売り……。荷車ひき、車夫など男まがいの肉体労働もいとわなかった。当時、青雲の志を抱いて上京する「苦学生」も多かったが、そのほとんどは男子であり、だいのような女子苦学生は稀有^{けう}だった。

だが、そうした「刻苦精励」のおかげで、学業を成し遂げ、郷里で裁縫塾を営む道を拓くまでに至ったのだった。

5

結婚は入学、就職とともに、人生における大きなエポックである。特に女性にあつては、その伴侶によって、ときに人生を決する一大事ともなる。

だいは明治四十（一九〇七）年、結婚する。夫の清水三蔵は海軍士官だった。教員として一時勤務した滋賀県・石部実業補習女学校時代に知り合った親友の世話によるものだった。日露戦争直後の当時、海軍士官は憧れの的であり、願ってもない良縁だった。

だいは、海軍将校の奥様としての華やかな生活を夢に描いた。だが、そうした生活は長くは続か



結婚した寺部三蔵・だい

なかった。三蔵が突然、自ら海軍を退官したからである。明治四十三（一九一〇）年のことだった。海軍をやめた士官の就職先は、田舎のことでもあり、なかなか見つからなかった。夫の受けるわずかな年金と恩給だけでは、母と子を抱えた生活の維持は難しく、だいは一家の将来の生活設計について思いをめぐらすことになった。

その思案のあげく、打開策として思い至ったのは、上京して夫の職を探すことだった。

——いよいよの場合は、下宿屋をして四人の生活を支えよう。

そう心に決めて、母に相談した。

だが、母やつは上京に難色を示した。

「私の生きているうちは郷里にいてもらいたい」

そして思い切った提案をした。

「桜井村は不便だが、安城へ出れば色々都合がよいだろうから、いつそのこと、この家移してみたら…」

やつは、時代の流れを的確に見ていた。

その頃の安城は勢いに乗っていた。

明治十八（一八八五）年には明治用水が完成して地域の農業基盤が整うとともに、明治二十四（一八九一）年には東海道線が開通して安城駅が設置され、駅を中心と

する道路網も整備されて交通インフラも整ってきていた。そうした〴〵地域発展〴〵の成果が着々とあらわれて、明治三十九（一九〇六）年には町制がしかれ、人口一万五千の安城町が誕生していた。

「聞けば、今まで知立にあつた警察署や郡役所、登記所なども安城へ移されるとか。安城は碧海郡で一番のまちになるようだからねえ」

やつが「安城へ出れば、色々都合のよいことが多い」と言うのも、そうした情勢をとらえてのことだった。

〴〵家を越ししてでもこの三河の地に…〴〵

こうまで言われると、だいても逆らえなかった。

やつは、さっそく安城町の朝日町（現ＪＲ安城駅東方）に、三百坪（約九百九十平方メートル）ほどの農地を求め、桜井にあつた家を移築した。

家屋は二十五坪（約八十三平方メートル）ほどの二階家だったが、ここで、近所の子女に裁縫の指導を始めた。

安城の地に進出して、本格的な裁縫塾を開設―これが、だいと安城が因縁を結んだ経緯だった。明治四十三（一九一〇）年の十一月頃、だい、二十八歳のことであった。



桜井村で裁縫を教えた6名が
遠く滋賀県石部までついていっ
た（後列右端・寺部だい）

*

桜井村では教え子は二十人ほどだったが、安城に移ると、だいを慕って寄宿して教えを受ける者もあつた。

だいは、桜井に塾を開いているうち、請われて滋賀県の石部実業補習女学校の教員になり、一時赴任することがあつた。このとき、桜井での教え子六名が遠く石部までだいに従って行つた。教え子にそれ程までに慕われたことも特筆されるが、大事な娘を一人の若い教員に任せて遠く勉強に出したというだいに対する親の信頼の大きさも注目される。だいの教育者としての資性が示される一断面でもあるが、その資性は安城の塾でも発揮された。

裁縫塾の運営は順調だった。

やがて、だいは、女子に必要な家事・裁縫を主体に一般教養学科を教える女学校を創ることを意図することになった。

7

「裁縫塾」ではなく、正規の教育令によつた「裁縫学校」を…。



明治 36 年苦学生時代の寺部だい

だいが、なぜ裁縫女学校を創ろうと思ったのか。
そこには、明治後期の女子教育において、私立裁縫女
学校の存在が大きくクローズアップされてきていたこと
があった。

*

「男は手習い、女は裁縫」：裁縫は多くの女性に必須な
たしなみとしてとらえられ、江戸時代から家で、あるい
は裁縫塾や寺子屋でその技能が伝えられていた。

明治に入り新しい学制が布かれて近代教育が始まったが、「女子には普通教育は必要ない」といっ
た偏見が持たれ、男子に比べて女子の就学率は低かった。しかし、そうした中でも、女子教育にお
ける裁縫の重要さは変わることなく、裁縫教育は脈々と続けられた。それが、明治三十三（一九〇〇）
年に小学令が改正されたことで様相が変わった。就学が督促・強化されたことや、女子に対する教
育観が変わってきたこと、そしてまた、日清戦争後に産業化が起こってきたことなど、さまざまな
要因によって、女子の就学は急速に増え、明治三十（一八九七）年で五〇・八%だったその就学率
は三十六（一九〇三）年には九〇%に達する急激な上昇を見せた。

このように女子教育が広まるにつれ、女子向けの中高等教育の必要性も出てきた。高等女学校をは
じめ実業学校、実業補習学校、師範学校、各種学校など、多様な女子の中等教育機関が全国に設立

されるようになり、各種学校の裁縫女学校も私立を主に多く輩出することになった。

裁縫女学校は、明治十年代から東京では渡辺辰五郎が設立した東京裁縫女学校や共立女子職業女学校などが草分け的な存在となつて全国に広がり、明治三十（一八九七）年ごろには百十五校、裁縫を教育内容の中心とした技芸や家政の学校をあわせると百五十校ほどがあった。この女子各種学校は、明治三十年代に約二・三倍という急激な伸びを見せ、明治四十（一九〇七）年ごろには校名に「裁縫」や「技芸」「実用」等の名を付けた学校は全国で三百七十校ほどに上った。

8

この頃の裁縫女学校の輩出にはもう一つの特徴があった。裁縫女学校の半数近くは東京・京都・大阪という大都市のある府県に集中していたが、明治後期には大都市以外でも発達して、大都市圏以外では約五倍という大きな伸びを示したのだ。

こうしたすう勢は愛知県にも及んだ。

明治三十五（一九〇二）年四月には豊橋に豊橋裁縫女学校（現藤ノ花学園）、明治三十八（一九〇五）年には名古屋に名古屋裁縫学校（現椚山女学園）が創立された。そして、西三河地域でも明治三十九（一九〇六）年六月に岡崎裁縫女学校（現岡崎学園）の設置が認可されて開校されるなど、各地に私立の裁縫女学校が名乗りを上げた。



明治 38 年東京裁縫女学校高等科卒業の記念写真。
中列左から 2 人目が寺部だい。前列中央は渡辺
辰五郎

*

学校の設置認可には、施設・設備、教員構成等の基準を満たさなければならない。資金の限られる中、最小規模でのスタートを図って、小学校令による各種学校を目指した。

授業料は「月額五十銭」と定めた。

所在する町村と密着する実業補習学校などでは、入学資格を原則的に町内に居住する者に限定して授業料は月額三十銭程度にし、他町村から通学する者の場合には五十銭に設定する例があった。

こうした潮流の中、だいは自らの家塾に思いを至らせた。

だいの家塾に通うのは裁縫技術を習得するという限定的な人が多く、中等の女子教育を受けるとなると、安城では名古屋か岡崎へ通うのが常であった。安城にはそれに応じられる学校がないからである。

高等小学校卒業者を対象とした女子の上級学校が安城にも必要だ。

—安城にも裁縫女学校を……。それを今できるのは自分しかない。安城の現状を直視するにつけ、だいには、裁縫だけでなく、家事や一般教養学科も教える中等の女子教育機関を安城にも設置したいというもくろみが触発されることになったのだった。

それにならったのだった。

だが、それに異論が出た。

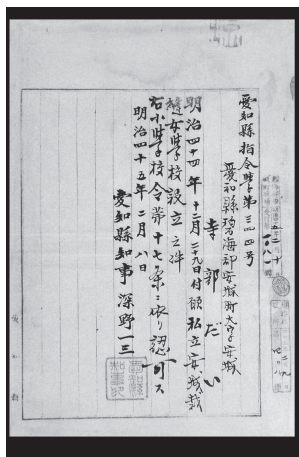
9

「五十銭の月謝をもらって五十名からの生徒を集めるのは、この安城町では見込みが立たず、きわめて困難だ」

地域性をおもんばかって、学校の運営を危ぶむ声が多かった。

しかし、一旦思い立った代いは、もうあとに引くことはなかった。

「学則では一律五十銭としておいて、実際には色々考えてもみましょう」



安城裁縫女学校設立認可証

事態への順応も考えながら、早急に設置の手続きをと
り、県から裁縫女学校設立の認可書を受け取った。日付
は明治四十五（一九一二）年二月八日付。翌々日にそれ
を受け取った代いは、さっそく四月開校の準備にかかっ
た。

裁縫女学校はすでに近く岡崎にあったが、蒲郡にもこ
の春、町立の裁縫女学校（現愛知県立蒲郡高等学校）が

できるといった情報も耳に入っていた。事を急がねばならなかった。

校名は地名を冠して「安城裁縫女学校」とした。学科は本科（二年制）、専修科（一年制）、研究科の三科で、入学資格は高等小学校の卒業者。

月謝は五十銭（当時の多くの卒業生の記憶によると、実際の授業料は月三十五銭であったようである）としたが、焦点の新入生は、これまでの裁縫塾の塾生の大部分と新たに入学した者でおよそ三十名だった。

認可を受けて二カ月足らずの間のあわただしい手配とあって、何もかもが応急、最小規模の体勢にあった。

本科は家事、裁縫、礼法、国語、修身、茶花道の六科目、専修科は裁縫と礼法と修身、研究科は裁縫一科目だけと定めたが、学科については町内の小学校校長や寺院の住職等に願い、技芸関係は校長のだいがすべて一人で担当した。

校舎も、桜井村から移転した二階建ての住宅がそのまま使われ、住宅と同居、教室は八畳と六畳の板敷の部屋二間のしきりを取り払ってつくった。二階の一間が遠方からの入学者数人のための寄宿にあてられた。

だが、生徒約三十名でも、二間の仕切りを取り払って作った教室は、いかにしても狭すぎた。



本科第5・6・7回卒業生。後列左から寺部三蔵、だい

10

住まいとしては、母のための一間が必要だった。母思いのだいには欠かせない部屋だった。また、この春先二月には、明治四十二年に生まれた長男・清に次いで、次男・清毅^{せいぎ}も生まれており、その育児のための部屋も必要だった。

こうなると、これ以上住宅を教室に使用する事は不可能である。

―何としても教室がほしい。

開校まもなく校舎増築の必要に迫られ、三十坪分三百円の資金を調達することになった。そして、だいは、これまでの蓄えに足りない二百円を頼母子講に頼った。

その経緯から深夜を徹して証印を求めることにもなったのだった…。

こうして、校舎の増築は進み、その年十月には、木の香もかんばしい校舎（第二校舎）が竣工した。二十四坪（約八十平方メートル）一教室のわずかな増築だが、だいは前途に夢を抱きながら、生徒の指導と学校経営に取り組んで

いった。

*

「おつ、エプロン学校^レの生徒がおしゃれな格好で通つていくぞ」

安城駅の近くには何軒かの店や家があつたが、その町並みをはずれると周辺は一面の水田と畑で、ところどころに松が枝を張っている。そんな田園風景の中を通学する女生徒：和服に白いエプロン（前掛け）をかけ、裁縫箱に弁当を入れた風呂敷包みを持つて通学する安城裁縫女学校生だつた。

学校は午前九時ごろに始まり、午後三時ごろに終わった。その登下校時のことだ。生徒たちは安城町内の者が六割を占め、その他も碧海郡内からの者が大半で、いずれも徒歩通い、互いに誘い合い連れ立つて通つた^{かよ}。そのエプロン掛けの装いから、安城裁縫女学校はいつしか、エプロン学校^レとも呼ばれるようになっていた。安城で唯一の裁縫女学校出現は、人々にも関心と呼んだ。

「あのエプロンも自作だろうが、裁縫のウデはなかなか確からしいな」
したり顔にそんなふうに見立てる人もあつた。

11

裁縫の授業は、個人学習で各自細目に従つて進められていった。だい（のちには助手の教生（卒業生）なども携わる）の個人指導を受けながら作品を作つて検閲を受ける。出来栄えが認められる



大正3年ごろの授業（教室うしろ、ミシンの前にすわっているのが寺部だい）

と次の作品に移る。だが、技術が少しでも不完全の場合は、最初から仕立て直しを命ぜられる。「指導態度はきわめてやさしいが、評点は実に厳しい」というのが生徒たちの実感だった。個人指導で徹底的に教えられた。細目を完了すると卒業できるが、うかうかしていたら規定の年数では卒業できない。そのため、生徒たちは自学自習に努め、「隣の生徒が教えられているのを横目で見ながら、自分で覚える」ということもよくあったという。

短時間に一定の作品を仕上げるという早縫い競争が行われたり、夏期休暇の間には、袋物、刺しゅうなどの手芸等各種の講習会が開かれ、参加者に修了証が渡されたりもした。

こうした厳しい教育指導が熱心に行われたのも、だいいにある思いがあったからだだった。

――単に女性として備えるべき裁縫技術を教えるだけでなく、裁縫を職業として自立できる女性を育成したい…。

それは、これまでの自らの体験に照らして生み出された教育への信念だった。その思いは、その後、校名の変更にも表されていく。履習科目には、裁縫の他には、本科でも専修科でも礼法を週一時間ぐらいずつ学習し、また希望者には茶道、華道が教えられた。裁縫技術についての厳しさは言うまでもないが、日常の生活態度についても厳格で、清掃、整頓は徹底して行われ、言葉づかい

や登下校時の挨拶もよく戒められた。

〃女性の能力開発〃 〃質素儉約〃 〃真心〃——だいは、こうした言葉を念頭におきながら、単に技術を伝達するのではなく、全人的教育を図ったのだった。このような厳しく徹底した教育方針は、当然ながら父兄からの支持を得た。

こうしたことが評価されて、生徒数は、三年目には開校時に当面の目標としていた五十人ほどになった。